

被災地交流「気仙沼復興支援プロジェクト」について

井川町立井川中学校

1 実践の趣旨・ねらい

本校では、東日本大震災の教訓を生かすべく、防災マニュアルの作成、大津波に対する避難訓練等を実施し、防災教育の充実を図っている。しかし、生徒の避難訓練等に対する受動的態度、危機意識の低さが課題として挙げられる。このままでは東日本大震災が風化してしまうという危うさを感じ、防災教育を新たな視点で見直すこととした。



陸地に打ち上げられた第18共徳丸

見直しに当たり、避難訓練の内容・方法を工夫することも充実を図る点で重要な視点ではあるが、大災害を自分自身の生活と直結して考える、という課題には対応できない。そこで、実際に被災地へ赴き、被災の状況を五感で感じることで「命を守る」という防災教育の根幹にあるものを内面から掘り起こし、体感したことが「命をつなぐ」という行動につながると考え、被災地訪問、被災地復興支援プロジェクトに取り組むことにした。

なお、被災地訪問（気仙沼市）については、本校2年生（53名）を対象に実施したが、本稿では「気仙沼復興支援プロジェクト」について記すこととする。

2 実践の概要

被災地訪問後、生徒の感想には「生きているという幸せを噛みしめて生きていく」「自分にできることを精一杯やって一生懸命生きたい」「命を大切にする」などの記述が見られた。この体験をもとに、「命をつなぐ」とことと被災地の復興に寄与する活動へつなげるため、「同じ東北人としてできること」というテーマのもと「気仙沼復興支援プロジェクト」に取り組んだ。

(1) 気仙沼観光物産品販売

気仙沼市を訪問した際、気仙沼観光コンベンション協会担当の方が「お金を落とすことも被災地にとってありがたい支援」と話していたことから、気仙沼の物産を販売し、その収益金を寄付するという活動を行った。学校で物産品を販売することから、海産物等の「生もの」は対象外とし、日もちの商品を選択し、事前に注文をとることとした。保護者にも通知し、幅広く協力を得ることとしたが、実物がないために注文数は予想に反して少なかった。そこで、当日販売も行うこととして準備を進めた。注文のとりまとめは、金銭のトラブルを避けるために教頭が当たった。



気仙沼観光物産品の販売

(2) 文化祭「井中祭」での生徒の活動

① 注文した物産品の仕分け、販売は生徒の活動とした。仕分けでは、注文した品物がそろっているか、限られた時間の中で交換するにはどのような方法がよいか、などを生徒に考えさせた。販売では、実際に金銭のやりとりがあることから、お釣りの準備や品物に値札の貼り付けなどを行った。当日は販売、品物の交換、呼びこみに分かれ活動した。予想以上の盛況で、開始から間もなく品切れ状態となってしまった。当日販売をあてにして事前注文しなかったという保護者が多数おり、関心の高さを伺うことができた。



井中祭での生徒の発表

② 井中祭では毎年、各学年の発表があることから、そこで被災地訪問について担当生徒が発表することにした。プレゼンテーションを作

成し、被災地の様子や語り部から教えられた震災当日の悲惨な様子、そして今現在復興を目指して頑張っている人々について触れ、活動の成果と感想を発表した。被災地訪問できなかった1・3年生は興味・関心をもって発表を聞いていた。

- ③ 活動を他学年に広げるため、井中祭の昼休みに3年生有志による募金活動を行った。参観に来た保護者や地域の方々に広く募金を呼びかけ、多数の協力を得ることができた。

(3) P T Aとの連携

P T A文化研修部と連携して物産販売を行った。例年であれば「バザー」での活動であったが、学校側から被災地復興支援の協力を依頼したところ、快く了承していただいた。販売以外にP T Aとしても何らかの形で協力したいという部員の申し出があり、端切れで作成したコースターの販売売り上げ金を寄付することになった。P T Aの協力が得られたことは、地域に被災地復興支援の関心を高めることにもつながり、来年度も企画して欲しいという要望も多く寄せられた。

(4) 気仙沼観光コンベンション協会との連携

井中祭当日、気仙沼観光コンベンション協会の方を招待した。当日は3名の方が来校し、生徒の被災地訪問の報告や合唱コンクールなどを参観してもらった。また、気仙沼観光物産品の販売を生徒とともにいった。井中祭閉祭式において、収益金、募金を生徒会長から渡した。協会の方からお礼のあいさつと気仙沼の復興に向けた取組のお話があった。全校生徒、保護者等に被災地の状況や今後どのような支援が必要かについて共通理解を図ることができた。

3 成果と課題

(1) 成果

- ・単にボランティアの一環としての復興支援ではなく、被災地に赴き体感した自然災害の脅威や被災に負けないで生きようとする人々の姿から、自分にできることは何かということ自ら問いかける機会となった。
- ・生徒の活動の様子について、機会を捉えて発信することにより、地域の防災意識の向上につなげることができた。

(2) 課題

- ・今後の被災地との関わり方として被災地の中学校との交流を考えている。しかし、心のケアを必要とする生徒もいることから、どのような関わりができるか十分検討する必要がある。どのような配慮が必要なのか、といったことを含め、「支援の押し売り」にならないよう現在模索中である。

4 おわりに

東日本大震災はこれまでの防災教育の根底を覆すほどの課題を残した。犠牲者のほとんどは津波によるものであり、阪神淡路大震災とは違った課題が浮き彫りになった。自然災害は人間の無力さをあざ笑うかのように頻繁に発生している。防災には限界がある。大切なことは災害としっかり向き合うことである。災害から逃れることができないのであれば、災害発生の際にどのような行動ができるか（防災行動）を真剣に考える必要がある。直接災害に遭遇していなくても「自分たちにできること」が必ずある。そのときに、具体的な行動を起こすことができる生徒を育てなければならない。

防災教育は、災害に対する知識を学び、必要な技能を身に付け、互いの命を守るために適切な判断力で行動できる子供の育成を図ることが必要である。加えて「知る：被災地を訪問する」「関わる：被災地を支援する」「伝える：感じたことを周囲に伝える」という視点も必要ではないかと考える。

東日本大震災からまもなく3年が経過する。被災地に関する報道が時の経過とともに少なくなり、人々の関心も低くなったように感じる。気仙沼市を案内していただいた方が「気仙沼の人々はみんな笑顔で頑張っています。でも心では泣いているんですよ」とつぶやいた。この大震災を風化させてはならない。